



○丸山 先生、ありがとうございました。

それでは、残りの時間、わずかなのですけれども、質疑応答と、それから全体で意見交換ができましたら、いたしたいと思います。どなたかコメントでも結構です。お手を挙げていただけますでしょうか。

それでは本日、京都からおいでくださいました西原先生、ぜひ一言お願いいたします。

○西原（純） 大変興味深いシンポジウム、ありがとうございました。私は京都から参りました。公益財団法人京都日本語教育センターの西原と申しますが、実はただいま、池田先生のお話にもありました、大学における日本語教育と、それから国内の日本語教育機関との連携というものが、例えば京都の場合ですと、立命館大学、京都精華大学のマンガ学部、そして先ほど西原鈴子先生からのお話にありましたような、アジア人材資金構想というものを実践いたしました中で、日本語教育



機関と大学での専門教育と、企業での受け入れのコンソーシアム組むという、4年間の経産省のプログラムが今年の9月に終了いたしましたけれども、これが1つの社会的なモデルとなったという評価を、経産省からも文科省からも受けたということがあります。

ということは、日本語教育機関と大学の専門教育、日本語教育も含めてですけれども、それと先ほど西原先生からのお話もありましたように、いわゆる高度人材、この国で仕事をしてくれる人たちを、企業で受け入れるということの一貫性を、入国から就活までの、留学生受け入れのグランドデザインの中で、日本語教育は初めから出口まで、就職しても必要であると。そういう中で、日本語教育が日本の中で、やはり質の高いものが連携して行われるということがこれからあるのではないかと、そのことを先ほどの池田先生のお話、また西原鈴子先生のお話からも強く感じまして、どうぞ立教大学の日本語教育センターが、そうした社会的な1つの環境をつくってくださる大きな発信のキーステーションになっていただければ、本当に心強く、ありがたいことだと思えました。どうぞよろしくお願いいたします。

○丸山 力強い応援のお言葉、どうもありがとうございます。

ほかにはいかがでしょうか。本日、学生の皆さんも来てくださっていますが、どうでしょう。

それではコメンテーターの西原鈴子先生にお願いいたします。

○西原（鈴） 先生方のご発表は、それぞれとても意欲的なお話でした。これからはこういうふうになっていくんだという決意表明として、本当に心強く聞かせていただきました。

1つ、学生さんたちを、どういうふうに積極的にこの中に巻き込んでいくかというのが、大学として、ぜひやっていただきたいことかなと思うんですね。

ちょっと思い出話なんですけれども、オーストラリア国立大学に赴任したときに、教授会に学生代表が出ていうことに気が付いたんですね。代表数人が、ただ座っているだけではなくて、人事とか、そういうときには退席してもらいます



けれども、意見を言うという立場で参加しているということがあって、ほかではあまり見たことがなかったのでびっくりしたんです。立教の学生さんたちも、立教のビジョンというか、そういうものをやっぱり共有して、そして大学とともに、大学のために働くということが、同窓生だけのことではなくて、現役の学生さんにも参加してもらえるようなことなんだろうなと思っています。年寄りはいつも、「このごろの若者は駄目だ」と言いたいんですけども、そんなことは全然なくて、学生さんたちは、すごい力を発揮できる母体だと思うので、その大学のビジョンの中の学生の位置ということをぜひお考えいただきたいと思いました。

○丸山 ありがとうございます。今のご発言についていかがでしょうか、パネリストの先生、お願いいたします。

○山口 今ご指摘いただいた点について、日本語教育センターの話からちょっとずれてしまうので申し訳ないんですけども、学生を巻き込むということと言うと、立教大学、いろいろな学部でやられているかと思います。例えば私が所属している経営学部の件で言いますと、いろいろなプログラムについて、学生の意見を積極的に吸い上げて、いわゆる社会変革の担い手であるという意識をきちんと学生が持てる。そのために提案を受け入れ、教育を受ける単なるサービスの受け手ということではなくて、自分たちがどういう学びをしたいか。それをきちんと学部のほうに伝えてもらい、具体的にそれをどうやったら実現できるのかということを考えてもらって、教育プログラムの改革に学生を巻き込むということは積極的にを行っています。

いわゆる高等教育機関で学ぶ若者というのは、未来を創造し、今の社会を変革する、そういう担い手ですので、そういう意識を学生が持っていることが非常に大切で、あとは大学に入ってきたときに、キャンパスの国際化が重要ということは、人的なネットワークをそこで広げて、これまで国内だけのネットワークだったのが、それが広がることによって、彼らが及ぼす影響先というのも大きくなるし、自分たちが影響を受ける周りも広がると思いますので、そこで多分、日本人の学生は、そういう意味で言うと、日本語教育についてもい





ろいろな意味での変革ということで、その携わりということも、多分可能性としてあるのではないかと。

ですから若い人たちということは、今の社会に適応するために大学にいるのではなくて、理想社会を実現する、そのためにどう変革していけばいいかということを考えるために大学に多分いるという認識を持ってもらうことが大切なのではないかとということで、さすがに教授会までは呼んでいないのですけれども、そういう近いレベルでいろいろな話を聞くということは、例えば経営学部はやっていますし、ほかの学部でもいろいろとやられているのではないかと思います。

○丸山 ありがとうございます。ほかにパネリストの先生方、いかがでしょう。池田先生、日本語教育の立場からどうでしょう。

○池田 日本語教育の立場から学生をどう巻き込んでいくかということについては、日本語教育センターができて、いろいろ学生を巻き込んだ新しいプログラム、イベントの実施が可能になりました。ですので、スピーチコンテストでしたり、それから学生にスピーチコンテストの原稿を文集にしたり、それから漢字検定なども実施をしまして、学生をどんどん教育プログラムの中に組み込んでいっています。スピーチコンテストの実施などだと、カメラマンからそういうとこ

ろまで、留学生が関わってくださって、協力をしてくれるということで、そういう輪をどんどん広げていけば、学生がどんどん日本語プログラムの中に積極的に、いろいろな形で入ってくるような形が実現できるのではないかと考えています。まだ所帯が小さいので、できることには限りがあるのですが、今後はもっと積極的に展開をしていきたいと思っています。

○丸山 ありがとうございます。本日いろいろご意見をいただきまして、改めて感じたのは、大学の国際化というのに、質の高い日本語教育を行うことで、貢献していくことができる。その質のいい日本語教育というのが、ずっと日本語教育が始まったときから重ねられてきた研究というのを積み重ねながら質を上げていくという、地道ですけれども、そういうことではないかなと改めて思います。

きょうは短い時間でしたが、また第2弾を考えまして、私たちの日本語教育センター、どういうふうに展開していくかということ、また継続してやってみたいと思います。

それでは司会にバトンを渡したいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

○高村 先生方、どうもありがとうございました。

それでは、これより閉会のご挨拶に移ります。閉会のご挨拶は副総長の西原廉太先生よりお願いいたします。西原先生、どうぞよろしくお願いいたします。



閉会の挨拶

○西原(廉) 本日は日本語教育センターの大変素晴らしいシンポジウム、ありがとうございました。特にご登壇いただきました先生方、本当にありがとうございます。改めて私を感じましたのは、シンポジウムをしますと、参加者が少なく、下手するとパネラーのほうが多かったりすることがあるのですが、これほどにたくさんの聴衆の方が集まってこられることに、改めて日本語教育センターに



対する期待と関心の高さをうかがえまして、大変うれしく思いました。

特に本日まで講演をいただきました西原鈴子先生のお話の中で、これからの大学の国際化、大きな地図の中で、その中で日本語教育というものがいかに大事かということを改めて学ぶことができました。ありがとうございました。

私は先々週ですか、韓国に行ってみまして、梨花女子大学をちょっと訪問したのですが、立教と同じぐらい、2万人ぐらいの学生で、同じぐらいの歴史の長さ、140年ぐらいの歴史を持っている、よく似ている大学なのですが、違う点は、キャンパスに国際的な学生が本当にたくさんあふれているんですね。それで梨花女子大の副学長に聞きましたら、よく韓国は、海外に、欧米に学生を送ることに熱心だと言われるけども、それも大事なんだけども、この大学に海外から学生をたくさん招くことを、むしろ重視しているということなのです。それで、その秘訣は何かと伺いましたら、韓国の大学は結構あるのですが、オハクタン、語学堂という、いわゆる韓国語の教育機関ですね。ある意味、プライオリティーをそこに集中して、さまざまなレベルに対応した、先ほど松田先生のお話にあったような、それぞれのニーズに合ったプログラムを展開していると。それで海外から学生が韓国に来て、すぐにプログラムに参加できるようになっているというようなことを伺いまして、改めて、翻って私どもも、この日本語教育というものが、実は池田先生がおっしゃったように、本学のグローバル化に、基本的に大事な課題であるということを感じたところでございましたので、本日のお話は大変その意を強くした次第でございます。

また、西原先生のお話の中にありましたけれども、日本語教育の基礎的なインフラも含めて、充実させていくことは重要なのですが、同時にやはり、本学の研究教育の魅力がなければ、やはり留学生たちは来てくれないだろうということを、一方で確認をしておきたいなと思いました。

そういう意味で、本学の教育研究のさらなる改革と、それから日本語教育センターの働きが、車の両輪のようにして、つながって、運動していくということをぜひ考えていきたいと思っています。

本学も 2016 年に、新たな全学的なカリキュラム改革を考えておりますし、同時に大学院改革も考えておりますけれども、その検討のプロセスの中で、日本語教育の要素をさらにしっかり入れ込んでいく、つなげていくことをぜひ今後も取りこんでいきたいと思いました。

そしてまた、石田先生のお話の中で、ハイテーブルの話が。実は立教大学は同じアングリカン、聖公会系の大学で、オックスフォード、ケンブリッジをモデルにしているんですね。キャンパスにきょう、ちょうどイルミネーションが点灯しましたが、あの辺も、オックスフォードモデルのキャンパスデザインを持っているのですが、形だけではなくて、ぜひハイテーブルを、第 1 食堂あたりで復活させたいとかねがね思っております、何かそういうような楽しいプログラムもぜひ今後、立教ならではのことを考えていければと思っています。

本日は長時間でしたけれども、大変充実した内容をいただきまして、ありがとうございました。立教大学としましても、日本語教育センターをしっかりと支えていきたいと思っておりますし、それから何よりも、本日お集まりいただきました皆さんが、これからも日本語教育センターを、さまざまな形でお支えいただければと願っております。本日はどうもありがとうございました。(拍手)

○高村 西原先生、どうもありがとうございました。

これもちまして本日のシンポジウムを終了させていただきます。本日は長時間にわたりご清聴いただきまして、まことにありがとうございました。アンケートはお帰りの際、受付にご提出ください。なお会場は 20 時 45 分に閉めることになっております。お帰りの際、お忘れ物などないよう、よろしく願いいたします。

本日はどうもありがとうございました。(拍手)

(終了 / 1 時間 58 分)

